

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## Filming Interwoven Interactions between Singers and the Audience : Chants of Lalibalocc in Ethiopia (Filming the relationship and interaction)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川瀬, 慈 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/00008564">http://hdl.handle.net/10502/00008564</a>

Itsushi KAWASE

Ph.D. Candidate, Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University

# 唄声がつむぐつなかりを撮る

エチオピア高原の吟遊詩人ラリベロッチ

川瀬 慈 京都大学 ASAFAS 博士課程

## はじめに

我々は神のはからいにより再会することができた  
 死が我々を訣たない限り このようにまた会うことができる  
 大地は無慈悲 あなたが死ねば あなたの体を 腐らせる  
 その前に「ほらどうぞ」と言って私に恵んでくれ  
 あなたは私に恵むのか 恵まないのか  
 出産が間近な妊婦のように 私をそわそわ待たせないでくれ<sup>1</sup>

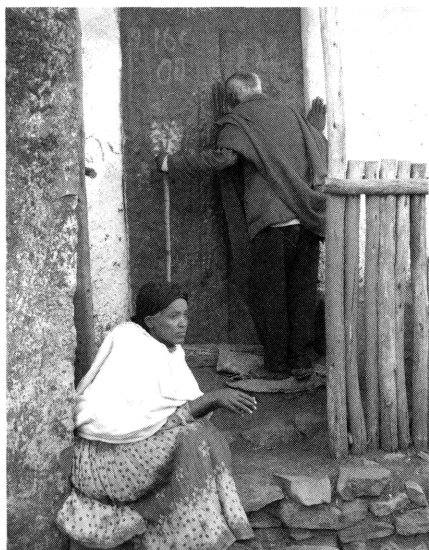
地を這う呪文のような男の唄声に、甲高く伸びやかな女のコーラスが、ピブラートをとところどころに刻みつつ、時に重なり、離れながら薄明の高原の冷気に溶けて広がっていく。ラリベロッチ<sup>2</sup>の登場である。エチオピア高原北部の地域社会においてラリベロッチと呼ばれる唄い手たちは、早朝に家の軒先で唄い、乞い、金や食物を受け取ると、その見返りとして人々に祝詞を与え、次の家へと去っていく。ラリベロッチのこうした活動は、<sup>こぜ</sup>瞽女や<sup>かどづけ</sup>春駒など、農作物の豊穰や家族の平穏を祈って各地を回ったという、わが国の門付芸能者や、托鉢の僧侶の姿を思い起こさせる。

ラリベロッチはエチオピア高原中部に点在する母村を拠点に、男女のペア、

1：2004年6月10日アゼゾ、北ゴンダールにて収録したラリベロッチ男性の歌詞。

2：ラリベロッチは複数形、単数ではラリベラ。

あるいは単独で、1年のほとんどを町から町を広範に移動して活動を行う<sup>3</sup>。ラリベロッチが唄う歌詞は、2行で1対となる押韻のリズム<sup>4</sup>を規則的に保ちながら展開していく。まず男性が、聴き手に金品を婉曲的に催促する内容の無旋律のパラグラフを唄いあげると、それに続いて女性が歌詞をもたない一定の旋律を唄い、男性、女性のパートが交互に繰り返され、聴き手に施しをせまっていく。金品や衣服、食べ残しの食物を受け取ったあと、ラリベロッチはそれらを渡した人物に対して「イグザベリ・イスタリン（神があなたに恵みを与えますように）」という特定



民家の軒先で唄う、映像作品「ラリベロッチ」の主人公夫妻。2004年5月、ゴンダールにて

のフレーズから始まる祝詞を贈る。ラリベロッチはしばしば唄いかける相手に関する情報を近所の住人から聞き出し、歌詞のなかにとりこんでいく。これらの情報には、名前のほかにも、宗教、職業、家族構成等が含まれ、それらは聴き手の気分を持ち上げ、聴き手を施しへとかりたてるのである。

人々のあいだでは古くから、ラリベロッチが唄い、乞うことを止めればコマタ（アムハラ語でハンセン病の意）を患うと信じ、病への恐れから活動の継続を余儀なくされている集団である〔Mesfin 2000〕という差別的<sup>5</sup>な言説が共有されてきた。エチオピア音楽を紹介する数少ない文献も、“謎のハンセン病

3：2004年1月、筆者はショワ州北部のエジェレ、デブラグルワッチ、フィチェ近郊においてラリベロッチの母村を確認し、世帯調査を行った。母村間はゆるやかな婚姻のネットワークで結ばれていることがわかった。ラリベロッチによれば、他にも、ゴッジャム州南部、ウォロ州にもいくつかの母村が存在するという。

4：押韻はベトウメタと呼ばれアムハラ詩にひろくみうけられる。

5：1960年代以降、海外のNGO団体や政府によって精力的な撲滅運動が行われてきたが、いまだにこの病や患者への根強い差別意識が人々の間にあることは否めない。

集団”[Pawne 1968]、“夜明けのセレナーデを唄うハンセン病者、あるいはその親族”[Shelemay 1982]等、そのどれもが、ラリベロッチに関するエチオピアの人々の言説を一方的になぞって、集団に与えられたおどろおどろしいイメージをさらに強調している。エチオピア北部のアムハラ社会では、結婚式や洗礼式などの祝祭儀礼や娯楽の場に呼ばれて弦楽器マシンコを弾き語る音楽職能集団アズマリが人々の生活になじみが深い。しかしながら、ごくまれにどこからともなく現れては去っていくラリベロッチの実態は、実際のところエチオピアの人々にもほとんど知られていないのである。

私は、映像作品『ラリベロッチー終わりなき祝福に生きるー』<sup>6</sup>（以下『ラリベロッチ』と略記）を用いて、ラリベロッチの活動や社会とのつながりを彼らの論理に寄り添いつつ、明らかにすることを試みた。本稿のⅠでは、撮影地の地理的背景や、当集団とその活動に関して紹介し、Ⅱ以降は、私がラリベロッチの日々の生活実践といかにかかわり、映像作品を構成したかについて、撮影と編集時における模索の過程も含めて検討する。以上を通し、自らの映像制作の立場を示したい。

## Ⅰ. ラリベロッチの論理

### 1. 映像作品の舞台ゴンダール

エチオピアはアフリカ大陸北東部に位置し、アムハラ、オロモ、ティグレをはじめ80以上の「民族」が、方言も含め100以上の言語を話すといわれている。『ラリベロッチ』の舞台ゴンダールは、青ナイルの源タナ湖の北に位置する古都である。ゴンダールはファシラダス王によって1636年に築かれ、約200年間エチオピアの首都として栄えた。当時は、外国人の侵入を一切遮断した封建社会で、エチオピア正教会による王の戴冠が続いた。また、ゴンダール時代は音楽、文学、建築などが繁栄したことが知られている。市内各地にはユネスコ世界遺産にも登録されているファシル城をはじめとする遺跡群や教会壁画が見られ、ゴンダールは現在エチオピアの代表的な観光地の一つにも数えられ

---

6：『ラリベロッチー終わりなき祝福に生きるー』（英語版:Lalibalocc-Living in the Endless Blessing-）2005年、25分、DV 撮影：ジャマル・モハメッド、川瀬慈、編集・監督：川瀬慈

る。2000年の統計では、ゴンダールの人口<sup>7</sup>は15万6千人で、そのうち89%が長期に渡って政治的主権を握ってきたアムハラ人が占める。宗教は80%がエチオピア正教徒、18%がイスラム教徒である。町中には40以上の教会があり、人々の生活様式におけるエチオピア正教会の影響が強く伺える。キリスト教徒のなかには年間約240日ある祭日と、肉など動物性蛋白質を避ける断食や、土曜と日曜の2日とも安息するという習慣を守っている人もいる。エチオピア正教の教えでは、個人の所有財産の約1割を教会や貧しいものへ捧げることが美德とされている。ゴンダールでは、路上や軒先で、当然の権利を主張するかのごとく物乞いをする人々の姿をよくみかける。乞食、教会の修道士、そしてごくまれにゴンダールへやってくるラリベロッチである。

## 2. 「ラリベロッチ」と呼ばれる人々

ラリベロッチが主な活動範囲とするエチオピア北部において、他集団が彼らを指して用いる呼称には大きな地域差がある。概してラリベロッチの他称には蔑視的なニュアンスが含まれるのであるが、逆にラリベロッチは、集団の呼称の由来に関して、他集団による言説とはまったく異なる解釈を与える。首都のアジスアベバを含むショワ州において最も一般的に用いられるラリベラは、彼らを指す他称のなかでも、最も幅広く知られているといえよう。ある言語学者 [Desta 1970] によれば、レリトゥ（アムハラ語名詞：明け方）とベラ（動詞：食べる）が、この呼称の起源であり、それは、ラリベロッチが明け方に物乞いを行うことに由来するという。一方、アジスアベバにおいて活動を行うラリベロッチは、12世紀に台頭したラリベラ王に彼らが専属的に仕えたことから、彼らがこの名で呼ばれるようになったと述べる<sup>8</sup>。

ウォロ州の人々によって使用される呼称アボウデは、アッバ（接頭辞：年配者や聖職者への敬称）とウダキ（名詞：ゴミ）に由来し、ラリベロッチが“ゴミのような人々”であるというニュアンスを持つ [Mesffin 2000]。それに対し、

---

7 : *Statistical Abstract 2000, Federal Democratic Republic of Ethiopia: Office of Population and Housing Census Commission Central Statistical Authority 2001*

8 : ボーンによるエチオピア音楽の概説 [Pawne 1968] にもラリベロッチがラリベラ王に仕えた専属の音楽集団であったという記述が見られる。

ラリベロッチ側<sup>9</sup>はアボウデが、アッパとウッドゥ（形容詞：高貴な、貴重な、高価な）に由来し、彼らが“高貴な人々である”という、まったく正反対の主張をする。ゴンダール州やゴジヤム州においてラリベロッチはしばしばハミナと呼ばれる。ラリベロッチの歌唱に関する音楽学的分析を行ったシェレメイ [Shelemay 1982] によれば、ラリベロッチが金品をもらえなかった際、人々を罵ったことから、ゲエズ語の動詞ハマヤ（中傷する）にこの呼称が由来するという。一方ラリベロッチによれば、ハミナは、ラリベロッチが人々に祝詞を与える際、人々がその祝詞に対してつぶやくお礼の言葉アーメンに由来するという。

ラリベロッチ内では、他集団から自集団を差異化するカテゴリーが共有され、“われわれ意識”を維持している。このカテゴリーの中では、ラリベロッチは自らのことを指し、ラワジという呼称を用いる。この語は、自集団の血縁的な紐帯をほのめかし、反対に、バルテという語が“他者、外部者”を指して用いられる。被差別的な位置にあるマイノリティ集団が、他集団による“名づけ”により、差別的なカテゴリーを一方的に再生産されることを嫌い、自称を他集団に対して公表しないケースがある [三浦 2004][Iwatani 2002]。あくまでも、ラワジ、バルテは集団内において用いられる呼称であり、他集団に声高に主張されることはないのである。

### 3. コマタ言説をめぐってーラリベロッチはなぜ唄い、乞うのかー

冒頭において、ラリベロッチがその活動を止めればコマタを患うと信じ、病への恐れから活動の継続を余儀なくされている集団であるという言説が人々のあいだで共有されてきたことを述べた。エチオピア北部では、被差別的な社会地位にあるマイノリティ・グループや職能集団に対して、他集団が一方的にネガティブな言説を付与することはよくあることであるが、本当に彼らは、ハンセン病が怖いから唄い、乞い続けているのであろうか。

ここでは、当集団のなりわいとコマタの因果関係をほのめかす起源伝承や、コマタに関するラリベロッチ自身の語りを簡単に紹介し、彼らの論理に光をあ

---

9：2004年4月アジスアベバに滞在するシヨワ州北部出身のラリベロッチのコミュニティからの聞き取り。

てみたい。

まず、ラリベロッチが語る集団の起源伝承の代表的な3つを以下紹介する。

### 〈起源伝承1〉

アダムとイヴは30人の子をもうけた。神は、祝福を与えるので、子供たち全員を神のもとへ連れてくるよう2人に命じた。しかし2人は、生まれた子供の半分である15人しか神の前へ連れてこなかった。神は、その15人だけに祝福を与え、残りの15人には呪いを与えた。神のもとに連れられて来なかった子の半分は動物になるよう命じ、同時に残りの半分には、「朝早く起き、人々のために祈り、それが親から子へと代々引き継がれるように」と命じた<sup>10</sup>。

### 〈起源伝承2〉

その昔ゲブレキルストスという名の青年がいた。生涯結婚せず、神への忠誠のもと宗教家として生きていこうと決心した。その矢先、両親はある女性との結婚を彼に強制しようとする。困りはてたゲブレキルストスは結婚式の当日逃げだしてしまう。しかし裕福な両親は多くの使いを派遣し、必死で彼を連れ戻そうとした。追われていることを知り、ゲブレキルストスは神に懇願する、自分の皮膚を裏返し、追っ手たちの目をくらますように、と。すると、彼の手足はたちまちただれ始め、みるみるうちにその人物が、ゲブレキルストスだと誰もわからないほどになってしまった。

8年の歳月が流れ、ゲブレキルストスは両親の家に戻るが、両親にはその男が自分たちの息子だとはわからなかった。それでもひどい皮膚病にかかった男の風貌を哀れに思った母親は、家の近くの小屋に彼を住ませ毎日残り物を与えた。ある夜、ゲブレキルストスは天使達に誘われ、天国へ召される。両親は小屋に落ちていた紙片を見つけ、そこに書かれたメッセージから、その男がゲブレキルストスだったと気づき、嘆き悲しむ。彼の神への純真な信仰心に満ちた半生を称え、施しをうけることのみで生き

---

10：2002年8月、アジスアベバで活動中のゴッジャム州出身60代男性からの聞き取り。

た姿にならない、子孫達は物乞いを実践して生きていくことを神に誓ったという [Mesffin 2000:34]。

### 〈起源伝承3〉

神が世界を創造したとき、その世界に神によって組み込まれるはずであったゲブレキルストスはたまたま食事に出かけて留守にしていた。神は戻ってきたゲブレキルストスに対して怒り「そのままずっと乞いつづけよ。人々はお前に欲しいものを与えるであろう。しかしもしそれをお前が怠ったなら、ヨブの傷<sup>11</sup>を与える」と命令した。子孫たちは神の罰を恐れ、物乞いを行うようになった。<sup>12</sup>

以上の伝承では、先祖を高貴な存在と結びつけることによって、ラリベロッチ自らの出自の「聖性」が論理立てられる。特に起源伝承2や3は、外部集団から付与されるコマタ言説に独自の解釈を与え、一般的には極めて卑しい行いとされることもある物乞い、すなわち彼らの現在のなりわいの起源と結びつけ、それを正当化しているのとらえることができる。

ラリベロッチの用いる隠語にシュカッチという語がある。これは“コマタ”あるいは、“コマタに感染する”を意味する。当集団のシュカッチに関する見解を把握するために行った聞き取り調査<sup>13</sup>では「ある一定期間（ラリベロッチは）活動を休むことができるが、その期間を過ぎるとシュカッチに体が蝕まはじめる」という考えから、「年配のラリベロッチはシュカッチを恐れているが、私は恐れない」「あくまでもお金のため、生活のために早朝の活動を行うのでありシュカッチへの恐怖などない」「シュカッチに冒されたラリベロッチを見たことはないので、私はシュカッチを恐れない」等、「ラリベロッチ＝コマタへの恐れ」の図式を真っ向から否定するような見解があることがわかった。

---

11：旧約聖書ヨブ記の一節。裕福で正直な男ヨブの信仰心を神は様々な試練によって試す。神がヨブに試した試練の一つに悪魔を呼んでヨブの体に巧みに“悪腫”をつけるという節がある。

12：2004年5月、ゴンダールで活動中のゴッジャム州出身70代男性と20代男性からの聞き取り。

13：2002年6月ゴンダール滞在中のラリベロッチ4人、2002年12月アジスアベバ滞在中の10人、2004年5月アジスアベバ滞在中の10人、計24人のラリベロッチにシュカッチに関するインタビューを行った。



また、ラリベロッチのなかには、シュカッチに対する語りと実際の生活実践に乖離がみられるものや、以下のMのように、シュカッチに対する考えが、時間とともに変化する例もある。

2002年の7月に私が出会ったシヨワ州北部出身のM〔当時17歳・男性〕は、アジスアババにおいて、2日に1回の割合で唄い、物乞いを行っていた。Mは当時公立小学校の6年生で、学校に行く前の早朝に活動を行っていた。Mは幼い頃から、兄等と活動をともにすることによって、歌唱技術を習得し、12歳のときに単独で活動を始め、アジスアババにおいて同じくラリベロッチの親類たちとともに間借りをして暮らしていた。活動を始めたのは、父から「活動をはじめないとシュカッチに体を触まれる」と促されたのがきっかけであるという。2002年12月にMは私に「9ヶ月間休むと、シュカッチに冒されるであろう。活動を行う理由は、シュカッチが怖いからと、金のためである」「将来、教育課程を終えたら医者になりたい。そして1年のうち9ヶ月間は医者としての仕事に従事し、残りの期間はラリベロッチとしての活動を行いたい」と語っていた。

2004年の6月、Mと再会した私は、本人から「歌唱活動を止めて9ヵ月になる」と知らされる。Mは、歌唱活動と同時に学校も止め、市場の日雇い労働者として、荷物運びを行いながら生計を立てていた。「シュカッチはただの迷信である。今後一切、歌唱活動を行うことはないだろう」と、その考えが大きく変わったことを示した。

実際のところシュカッチをめぐるラリベロッチの意見や立場はさまざまである。他集団による一方的な言説のように、ラリベロッチの活動契機を一概にハンセン病と結び付けられるとは限らないのである。

## II. 路上の物語に侵入する

### 1. ラリベロッチと私

エチオピアに調査で赴く前から、文献等を読み、この集団に強い好奇心を抱いていた私が、実際にラリベロッチと呼ばれる人々に出会ったのは、2001年のことである。エチオピアに来て間もない頃、ゴンダールでアズマリの音楽調査を行っていた私は、ラリベロッチの夫婦が町で活動を繰り広げているという噂を地元の学生たちから聞いた。この夫婦は、その後『ラリベロッチ』に登場

するゴジヤム州出身のラリベロッチ、ボッガラとアイザレッチ<sup>14</sup>である。

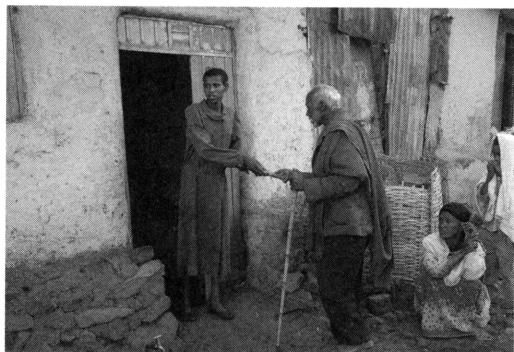
とりあえず、夫妻の唄を聴かせてもらうために、私が滞在していたホテルに夫妻を招いた。両親が見ず知らずの外国人に連れ去られると思ったのか、夫妻の3人の幼児たちは取り乱し、泣き叫んだので、結局子供たちも、夫妻とともに私の部屋まで来てもらったのを覚えている。多少のぎこちない雰囲気の中、夫妻に唄を披露してもらったが、かつて聴いたこともない唄の音色と、独特の発声法や耳をつんざくような声量に度肝を抜かれ、私はこのときから彼らの唄の虜になった。2002年の半年間のエチオピア滞在の折には、再び夫妻と、夫妻の親戚のラリベロッチの集団にゴンダールで再会し、当集団に関する基礎的な情報を学ぶ機会に恵まれた。その後、エチオピアへ渡航するたびに、ゴンダールへ唄いにやってくる夫妻やその家族と再会することとなる。この夫妻と子供たちは、南は首都のアジスアベバ、北はラス・ダシェン山の麓まで、町から町を移動しながら活動を行っていた。ゴジヤム州の彼らの自宅には、エチオピア暦の新年にあたる9月の数週間のみ滞在し、つかの間の休息ののち、すぐにまたアムハラ高原を1年かけてひとまわりする旅に出かけるのである。この家族がゴンダールへ立ち寄るのは、雨季にあたるだいたい5月下旬から7月にかけてであった。

2004年には、私は夫妻の紹介で、ラリベロッチが拠点とするいくつかの母村での調査も行った。ちょうどこのころ、エチオピアの人気歌手のゴサイエが、ラリベロッチの女性と恋に落ちるというテーマの唄を唄い大ヒットさせた。カセットやCDをリリースして海外で活躍するなど、ローカルな文脈を逸脱して、ポピュラー音楽の世界で活躍するアズマリは多数いる。しかしながら、人々の中で強い蔑視意識があるコマタと結びつけられるラリベロッチには、ポピュラー音楽の世界と関わるチャンスがそれ以前はまったくなかった。このヒット曲以来、ジャーナリストや研究者を中心に、この“謎の音楽集団”に関する関心が一気に高まり、雑誌やラジオのインタビューを受けるラリベロッチも出てきた。

私は出会った当初から、夫妻が街中の各区域をつぶさに訪れ活動を展開する

---

14：夫のボッガラ・アンメヌは当時73歳、妻のアイザレッチ・レンマは53歳であった。



紙幣をうけとるボッガラ老人。  
2004年5月、ゴンダールにて



高音のコーラスを唄うアイザレッチ。  
2004年5月、ゴンダールにて

様子、宿での生活風景、活動に関する語りなどをただ彼らの不思議な歌声に憑かれるようにデジタルビデオカメラ<sup>15</sup>で撮影してきた。夫妻は、午前5時に近隣のモスクから聞こえてくる1回目のアザーンの斉唱で目を覚まし、5時30分の2回目のアザーンを活動スタートの合図とする。活動を終え、ゴンダール・バスステーション裏の間借り宿に戻るのはいたい午前11時ぐらいであろうか。宿に戻るとすぐに、妻のアイザレッチは白い布袋のなかに貯めたその日の報酬を数え始める。正午には、彼らの一日の仕事がほぼ終わるのである。昼食後、夫は夕方まで酒場で過ごし、妻は夫の服を作るために糸つむぎを行ったり、コーヒーを沸かして飲むなどゆったりと過ごす。彼らの生活のサイクルに身をまかせつつ、聞き取り調査では釈然とした答えを得られなかった「ラリベ

15 : SONY VX2000

ロッチはなぜ唄い、乞うのか」という問いを、悶々と反芻していたように思う。

## 2. 映像作品の構成

調査と調査の合間に日本に帰った際は、研究会や学会、カフェでの上映会等で、夫妻の活動の様子をとらえたフーテージ映像の上映を重ねた。オーディエンスからの予想もしない多様なコメントや質問は、その次のエチオピアでの撮影や調査に少なからず反映されていった。結果的にフーテージ映像の上映は、映像をひとつの作品としてまとめるにいたるきっかけとなった。

ただし、テレビのドキュメンタリー番組によくある、時代や社会の「問題」を凝縮し、ときにはデフォルメして伝達するという、メッセージ性を強く打ち出すような作品には仕上げたくなかった。ラリベロッチの唄声の音色が持つ摩訶不思議な吸引力と同時に、ゴンダールの町の人々との豊かなやりとりを支えられて展開する夫妻の活動に強く惹かれた私は、この夫妻の生活パターンに徹底的によりそうことによって、ラリベロッチが生きる日常を表現したいと考えたのである。

そのため、解説やナレーションを廃し、夫妻の早朝の活動をとらえた比較的長めのワン・シーンからなるシークエンスを作品の中心に位置づけ、対象となる唄い手の素のエネルギー、唄い手と人々とのめぐり合いの交叉の細部にフォーカスした。ラリベロッチの唄を通してつむぎだされるラリベロッチ夫妻と人々のつながりに宿る物語に侵入し、映像作品として切り取ることに重点を置いた。そこでは、夫妻と夫妻の訪問を受ける側の反応や表情が双方収まるようなフレームの切り方や構図をこころがけ、夫妻の唄を享受する人々、あるいは享受しない人々と夫妻とのかけひき、緊迫した路上の人間模様を作品のなかでくっきりとした輪郭を持たせて描くことを目指した。人々の夫妻に対するリアクションは、親しみをこめた挨拶から中傷、罵声にいたるまで、こちらが聴き取れる限り、作品中は字幕を入れるようにし、ラリベロッチを包摂する人々の態度や感情を浮かび上がらせるよう試みた。また、夫妻やその子供たちの語り、歌唱活動以外の時間のラリベロッチ一家の営みを、夫妻の早朝の活動をとらえたシークエンスと対比させるかたちで並列させ、作品に一定のリズムの緩急を与えた。作品全体の構成は以下のとおりである。

## 字幕・プロローグ

- 1 活動の様子：民家を移動しつつ唄う夫妻
  - 2 酒場でのボッガラの語り（活動起源に関する伝承）
  - 3 活動の様子：息子をつれての音楽活動、唄いかける相手に関する情報収集
  - 4 宿での食事風景
  - 5 活動の様子：キリスト教徒・イスラム教徒への歌唱内容の対比
  - 6 宿での夫妻の語り（他集団の言説に対する意見）
  - 7 活動の様子：肉屋でのやりとり
  - 8 酒場でのボッガラの語り（今後の予定、活動経路）
  - 9 次の町へ発つラリベロッチ一家
- タイトルバック

### 3. ラリベロッチに対する人々のリアクション

本書添付のDVDでもとりあげた『ラリベロッチ』の第1シークエンスでは、ラリベロッチの早朝の活動と、彼らの来訪という出来事に対する町の人々のさまざまなリアクションを、約7分のノーカット映像の中に映し出した。当シークエンスは、作品中、ラリベロッチと人々の相互行為が最も多様に描写される部分であり、作品の根幹の部分ともいえる。

まず家の軒先で、エチオピア北部の代表的な食物であるインジェラをつくるために、緑色のバケツに手を入れ、原料のテフの粉と水を混ぜ合わせている中年の女性が登場する。ラリベロッチ夫妻が彼女に対して唄いはじめようとした矢先に、女性はあたかも夫妻を追い払うかのように紙幣を手渡す。ボッガラは金品を受け取ると、家々の玄関を背に、金品をくれた相手に対する祝詞を、隣近所に響き渡るように唄い上げる。そんなときは皆、両手のひらを胸元で天に向け、「アーメン」と繰り返しながらラリベロッチの祝福を受ける。映像のなかでは1軒目、2軒目と、紙幣を無事受け取り、高らかに祝詞を唄いあげるボッガラの姿がみられ、夫妻の活動がこのまま順調に進行していくような期待感すら与える。しかしながら夫妻が3軒目の家に移動しようとした矢先、その

家の住人とみうけられる少女に「お母さんはいないってば」と歌唱をこぼまれてしまう。少女の言葉から、一家の財政を管理するのが母親であることが推察できるが、母親が実際に留守なのかどうか、真偽は定かではない。

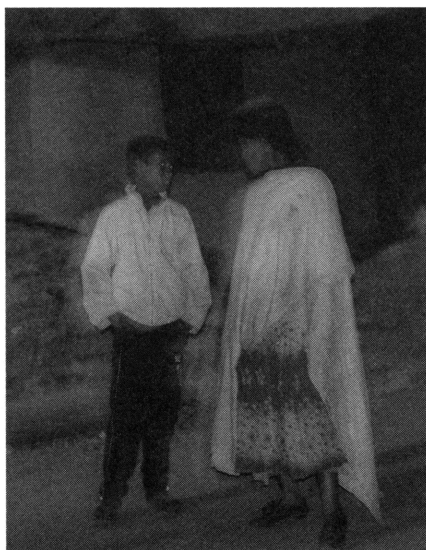
ラリベロッチに対する人々の反応は多種多様である。親しみを込めた挨拶を投げかけるものもいれば、「この家の主は、教会へ出かけて留守にしている」「家族が病気で寝ているから黙ってくれ」「最近、祖父が亡くなったの」<sup>16</sup>等、この少女のように、ラリベロッチが唄うのを止めざるをえないような言葉を投げかけ、彼らを追い払うものもいる。映像のなかでボッガラは、少女の言葉を見無視して通りすぎるわけでも、怒りをあらわすわけでもなく「そんなに怒らなくてもいいだろ せっかくのかわいい顔が台無しだ」と彼女にすかさずジョークを交えて対応する。ボッガラの言葉に対して、夫妻をとりかこむ近所の人々から笑い声がもれ、とげとげしい態度で夫妻を追い払おうとした少女さえ思わずふきだすのが確認できる。人々の笑い声につつまれながら、その後少女とボッガラのあいだで次のような対話がなされる。「少女：母はここにいないってば」「ボッガラ：さっきここにいただろうが」「少女：神に誓ってここにいないの」「ボッガラ：嘘つくなよな」。結局、夫妻に何も与えなかった少女に対して、野次馬の1人から「野次馬男性：飯でも分け与えてやりなよ」「ボッガラ：それなら妻に分け与えてくれ」「野次馬男性：それをこの外国人が食っちゃうんだぜ」というやりとりがなされる。夫妻と人々のやりとりは、ときにコミカルでユーモラスに人々をつつみこんで展開する。

逆に撮影中、こちらが冷や汗をかくような緊迫した場に遭遇することもある。5軒目の家にさしかかる場面が良い例である。玄関に立つ中年の男性が「こっちに来るな」「そいつ（私のこと）も連れて失せな！」「黙れ!」という強い歌唱拒絶の言葉を、まるで犬や猫でも手で追い払うような仕草とともに夫妻に投げかける。ボッガラも粘り強く応戦する。「ボッガラ：祝福を与えてやるんだからそんな言い方はよせ……」「中年男性：撮ってるじゃないかよ」「ボッガラ：あんた今年はどうしちまったのさ？」「中年男性：撮ってるじゃないかよ」「ボッガラ：じゃあ撮影の何が悪いっていうんだい？」。その後夫婦は、かたく

---

16：死者の出た家では喪に服す。唄や踊りは避けられる。

なに拒絶反応を示す男性への歌唱をあきらめ、次の場所へと移動をはじめ。中年男性は最後に「エチオピアが乞食だらけだって、外国で思われるだろう」という言葉を夫妻と私に吐き捨てる。乞食を意味する“レンマイ”という語には強い侮蔑的なニュアンスが含まれる。同時に、夫妻に対してのみならず、“物乞いをするエチオピア人”を撮影し、外国に持ち帰る（であろう）私への不快感を男は表現したかったのかもしれない。エチオピア北部の知識層、エリート層の中には、私が映像作品の中でとりあげる音楽職能集団アズマリやラリベロッチなどによる活動



唄いかける相手の情報を少年にたずねるアイザレッチ。2004年5月、ゴンダールにて

を、恥ずべき文化である、ととらえる者も実際に多いことが、映像作品の上映を繰り返してみてもわかった。撮影中、もっとも頻繁に町の人々が夫妻に投げかける言葉に「この外国人（私）はあんたたちの姿を映像におさめて、国へ帰ってから高い値で売るはずだ、撮影を止めさせろ」というおせっかいな忠告があった。そのようなときボッガラはいつも笑いながら「我々の息子（私）が、われわれの映像を売って金持ちになるなら結構なことだ」「川瀬が我々の映像を売って、学費を納めるなら、それは我々の本望だ」等のジョークを返し、私を擁護してくれた。

### Ⅲ. 撮影時にこころがけたこと

#### 1. 被撮影者へのフィードバック上映

撮影をはじめたばかりのころ、撮影した映像をビデオカメラの小さなモニターを使って被撮影者であるボッガラ一家と共に観るという行為を繰り返した。私が何を撮っていたのかを被撮影者に随時フィードバックしつつ、私の

調査研究に関して彼らに説明し、慣れない撮影や機材に対して彼らが抱く警戒心を、少しずつ解こうと試みたのである。自らの姿を映像という媒体を通して観察することは、彼らにとってはこれが初めての経験であり、撮影した映像を私が再生するたびに、彼らはモニターに映る自分たちの姿を指差し喜んでいった。いつしか、撮影が終わるたびにラリベロッチ側から、フィードバック上映をせがむようになり、それはラリベロッチが間借りをする宿の近所の住人たちも巻き込む、一大イベントと化してしまった。フィードバック上映は、撮影時のごちなかったラリベロッチと私の関係や、カメラに対する夫妻の警戒心を和らげるという点において、確かに有効であったが、同時に調査の新たな展開をももたらした。調査・撮影時には私が気づかなかった多くを、ラリベロッチ自らが指摘し、教えてくれたことである。その一つが隠語の存在である。ラリベロッチの隠語には、アムハラ語語彙を語頭子音の変換、音位転移、語根への音節付加等、一定のパターンに基づき変形させた造語が多く見られる。それらは、ほんの少しアムハラ語彙を変形させるだけの言葉遊びのようなものであるが、アムハラ語話者にはその語が何を意味するのか全く理解できないのである。この隠語を用いて、歌詞と歌詞のあいだを縫うように、活動に関わる重要な情報が頻繁に交換されていたことが結果的に、フィードバック上映を通して明らかになった。同時に、フィードバック上映の繰り返しは、私自身が彼らの隠語を習得していくきっかけとなったと同時に、当集団やその活動について互いにより深く理解するきっかけとなった。

## 2. 撮影時のトラブルを避けるために

夫妻は唄いながら家々の敷地内に入り込むことを厭わない。エチオピア北部アムハラの地域社会では、個人の家屋に家の住人以外の者が出入りすることが頻繁にあり、他人の敷地内への侵入に関しては日本などと比べれば人々の間に比較的寛容な姿勢がみうけられる。しかしながら、玄関の扉の節目から家の中を堂々と覗き込み、住人の所在を確かめる夫妻に私はなかなか馴染むことができず、いつもはらはらさせられた。私は、撮影につきまとうあらゆるトラブルを想定し、対処法を念頭に置きつつ撮影を行った。時と場合によっては物乞いと混同されることもあるラリベロッチのあとを追いまわす私の調査・撮影は、



一部の住民にとっては、不可解極まりない行為であつたらしい。撮影中、住民たちに嘲笑や侮蔑的な対応を受け、こちらが憤慨することも度々あつたが、撮影を放棄していちいち相手をすることはできない。撮影をめぐるゴンダール市民との不必要なトラブルを避けるために、調査許可証を用いた説明や、挨拶、ジョーク等による地域住民とのコミュニケーションは欠かすことができなかった。エチオピアでは政府や研究機関など、何らかの公的な機関が発行する公文書は、時として調査の大きな手助けになりうる。私は、調査内容・目的をアムハラ語で明示したアジスアベバ大学発行の調査許可証を、撮影や調査の場に必ず持参し、こちらの行動を訝しげに見る人々やカメラに群がる野次馬に対して、必要に応じては、こちらから提示し、調査・撮影への協力を呼びかけるようこころがけた。私が主にビデオカメラを持って撮影していたので、調査助手である地元の大学生が専らこの仕事を行ってくれた。同じように、現地語による地域住民への挨拶やジョークも、人々が撮影に対して抱く警戒心を和らげ、円滑な調査・撮影を進めていく上で重要であることがわかった。簡単な挨拶はもちろん、ラリベロッチが用いる祝詞やエチオピア北部のキリスト教徒やイスラム教徒特有の宗教的な言い回し等を挨拶に織り交ぜ、初対面の住民たちの警戒心を解く私の試みは、撮影中幾度となく功を奏した。

### 3. 撮影者の存在

撮影に不快感をあらわした中年男性、ラリベロッチを撮影する私に対する近所の子供たちの嘲笑、「ほら、あんた撮られているわよ」という老婆からの指摘に対して「そうよ。2人の『古いぼれ』を撮っているだけよ」と笑顔で答えたアイザレッチ。2006年の2月下旬にアジスアベバ大学エチオピア研究所(IES)において当作品の上映を行った際、あるエチオピア人歴史学者が、私やカメラに対する人々のさまざまなリアクションや、それらを場面对応的にユーモラスに包み込み、歌詞にすら即興的にとりいれていくラリベロッチ夫妻を指し「カメラの存在が人々に影響をあたえすぎているか」「どこまでがラリベロッチ本来のパフォーマンスであるのか」という質問を私に投げかけた。実際、三脚の上に固定したカメラでとらえた長時間にわたる未編集映像こそが、撮影者の先入観や偏見が排除された、人々の本来の行動様式を抽出できる

方法であるという民族誌映画制作の立場がもてはやされた時代もあった[Ruby 2000]。しかしながらそもそも、撮影者やカメラの存在が対象の人々の行動様式や態度に映し出されるのはむしろ自明の理であり、それらを人々の意識の中から完全に消し去ることなどできないであろう。

私はラリベロッチ夫妻の「本来のパフォーマンス」を「客観的に」記述することを究極の目標としていたわけではない。少なくとも臨機応変にあらゆる状況に対応し、路上での人々のやりとりや私の存在を、自らの唄のなかに柔軟にとりいれていく夫妻の姿にこそ、ラリベロッチと呼ばれる人々のパフォーマンスの本質を見ていた。そして、そこにカメラとともにせまったわけである。

## おわりに

撮影の過程は、単に「撮る人」が被写体のことばや行動にフォーカスをあわせるということではない。『ラリベロッチ』に関わるアクターは、現場では少なくとも「撮る人」「撮られる人」「撮られないけれど撮るのを見ている人」があり、その後の作品についても「物語を構成する人」だけでなく、「作品を見る人」が誰であるかも、問題になってくる。撮影者である私は、つねにこれら複数のアクターのつながりの相互作用の輪の中にあることを忘れてはならないであろう。

とはいえ、撮影現場という特定の場において、私はしばしばビデオカメラのレンズのむこうに展開する対象に吸い込まれていくような感覚にとらわれることがある。長い時間をかけてラポールを築きあげ、ビデオカメラを介して他者の経験を共有しようと没頭する過程では、知らず知らずのうちに、「撮る人」「撮られる人」が互いの領域を侵食しあい、その境界線を曖昧にさせるのであろうか。映像作品は人々の営みの記録にとどまらず、私と撮影対象の人々がカメラを介して同じ時空間を生きる痕跡ともいえる。

ヒッチコック監督の有名な言葉に“In feature films the director is God, in documentary films God is the director.”がある。フィールドワークの現場では、交換される情報の意味に関する互いの合意のみならず、撮影・調査に対するあからさまな反応をはじめ、見解のずれや衝突、嘘や冗談、言語化できない感情の起伏も生じている。文字媒体の首尾一貫した物語以上に、カメラはこ

うした領域を生々しく照らし出すことがある。これは制作者の意図云々にかかわらず映像の中に映し出されるので、制作者が容易にコントロールできるものではない。また調査・撮影時には、意外な発見やこちらの予想もしなかった出来事も起こりうる。カメラは、ラリーベロッチ夫妻のパフォーマンスのように、臨機応変かつ柔軟に事象の変化を捉える必要があるだろう。

フィールドワークの現場で、調査者に迫ってくるコントロールし難いリアリティを人類学の枠組みのなかでどう位置づけ、整理して考えればよいのか模索しつつ、今後も私は作品の制作と上映という実践を積み重ねていきたい。それはすなわち、民族誌という首尾一貫した起承転結の物語から、人間の営みを解放する作業に他ならない。

---

#### 参考文献

- 大森康宏. 1999. 「映像人類学 人はじめ」伊藤俊治・港千尋編『映像人類学の冒険』せりか書房：144-156.
- 三浦耕吉郎. 2004. 「カテゴリー化の罫—社会的対話のフィールドへ」好井裕明・三浦耕吉郎編『社会学的フィールドワーク』世界思想社：201-245.
- Destà, T. 1970. *New Amharic Dictionary*, Addis Ababa: 725 (in Amharic).
- Iwatani, A. 2002. Strategic “Otherness” in the Economic Activities of Commercial Nomads: A case of the Vaghiri in South India. *Journal of the Japanese Association for South Asian Studies*, 14.
- Mesffin, M. 2000. *Abbaude Oral Poetry in South Wollo: A Descriptive Analysis*. A thesis Submitted to the School of Graduate Studies of Addis Ababa University for the Degree of Master of Arts in Literature.
- Pawne, M. 1968. *Ethiopian Music*, Oxford University Press.
- Ruby, J. 2000. *Picturing Culture*, The University of Chicago Press.
- Shelemay, K. Kaufman. 1982. The Music of Lalibellocc: Musical Mendicants in Ethiopia. *Journal of African Area Studies*, Vol.9.